

漱石の『カーライル博物館』と

Carlyle's House

松 村 昌 家

漱石は『カーライル博物館』の中で、「余は倫敦滞留中に四たび此家〔カーライルの旧宅〕に入り四たび此名簿に余が名を記録した覚えがある」と書いている。これは先ず、彼の Carlyle に対する関心の深さをあらわす一つの証拠と考えてよからう。果して漱石が一一ち写しとったものか、それとも何かの目録の類によったものであるかはともかくとして、彼が「カーライル蔵書目録」（『カーライル博物館』発表の翌月、明治38年2月に、同じく『学燈』に掲載）を所持していたことも、更にその関心の深さを裏づける。『倫敦塔』の場合もそうであるが、漱石がロンドン生活の中での見学に基づいた、この随想風の小品の中に、彼の作家としての特質の萌芽、文学的思想や想像力の特性の芽生えを見ることは、それなりに重要なことだが、それよりも根本的な問題として、この作品の成立の経緯を明らかにする必要がある。

『倫敦塔』の場合と同じく、漱石がただ Carlyle の故宅を訪ねたというだけでは、『カーライル博物館』は生まれて来なかったはずである。前者におけるイギリスの歴史、Shakespeare の劇、Ainthworth の小説のような、漱石の素材となったものは何であったのか。『倫敦塔』の場合と異って、漱石はそれについて一言も語っていない。試みに岩波『漱石全集』（第2巻）や集英社『漱石文学全集』（二）の注解を見ても、Carlyle に関する資料的考証やアイデンティフィケーションは、皆無だといってもいい位である。もちろん注解にはそれぞれの方針があることだし、漱石の行なっている言及や引用を一一ちアイデンティファイする必要などないといってしまうまでもあるが、少なくとも漱石と Carlyle との関係、両者の親近性の問題を考えようとするならば、

先ずはこの考証が行なわれなければならない。Carlyleの人間性や事績をふまえ、それに対する漱石の反応の示し方を考えてこそ、両者のつながりの特徴を明らかにすることができるであろうからである。

漱石が書いているように、「カーライルの歿後は有志家の発起で生前使用したる器物図書典籍を蒐めて之を各室に按排し好事のものには何時でも縦覧せしむる便宜」がはかられたのは——すなわち Carlyle の旧宅が「カーライル博物館」として一般に公開されるようになったのは、1895年（明治28）7月26日。そして翌1896年に、Carlyle の甥の Alexander Carlyle による *Carlyle's House* という小冊子がガイドブックとして発行された。一方 Carlyle の伝記としては、J. A. Froude による *Carlyle's Early Life* 2巻および *Carlyle's Life in London* 2巻（ともに Longmans, 1890）があり、また Carlyle 自身の『回想記』（*Reminiscence*）がある。これらの『伝記』や『回想記』を主要な資料として、Carlyle の「チェイン・ロー」（Cheyne Row）への転居の経緯、そしてその家における生活に関するエッセンシャルな内容を抽出して小冊子としてまとめたのが、Alexander Carlyle の *Carlyle's House* である。

漱石は、カーライルの伝記的事績について、このうちのいずれか、あるいは、これらすべてを資料として用いたということになるであろう。だが、『カーライル博物館』が直接に Froude に基づいているとは判断し難い。その内容が、余りにも Alexander の書いたものと類似しており、結末の部分に至っては、両者が完全に一致しているからである。漱石は『漾虚集』に挿画を依頼した中村不折宛の手紙（明治39年2月20日）に、「カーライルの家の写真は持合せずカーライルの家に関する案内記様のものは別封にて入御覧候」と書いているが、この「案内記様のもの」とは、Alexander の *Carlyle's House* であったに違いないのである。

漱石は、「公園の片隅」の演説者とチェルシーの哲人^{セイジ}のユーモラスな対話を空想することから始めて、現実のチェルシーに立ち戻り、Carlyle がスコットランドの田舎からロンドンに出て来て、苦勞のあげくに見つけた借家に関し

て、その夫人の意見を求めたことを述べる。「四千萬の愚物と天下を罵った彼も住家には閉口したと見えて、其愚物の中に当然勘定せらるべき妻君へ向けて委細を報告して其意向を確めた」という、その大思想家の实际的面でのうとさを述べているところに、最初からわれわれは、漱石自身の風貌が彷彿として重なり合うのを感じる。

これは1834年5月のことであった。Carlyle 夫妻が、それまで6年間生活していたスコットランドのクレイゲンパトック (Craigpenputtock) の家を払って、ロンドンに移る決心をしたのがその年の春。そして5月初めに Carlyle は、先ずひとりでロンドンに上り、Anton Street に下宿しながら、適当な住家を探すのに東奔西走の苦労を重ねていたのである。彼がチェーン・ローで見つけた家について、夫人の意向をただしたのは5月21日であった。その手紙の中で Carlyle は、この地区の環境について詳述し、Leigh Hunt が近くに住んでいること、Thomas More や Smollett 等のゆかりの地であることを述べているのである。

この手紙に対する Carlyle 夫人からの返事 (5月27日) の中から Alexander は、“And now, my Darling, with respect to these two houses, I declare to thee they both look so attractive on paper, that I cannot tell which I ought to prefer...” (P.14) で始まる部分を引用しているのであるが、漱石における「細君の答」は、これをアレンジしたものにほかない。このあとに続く漱石の叙述は、Alexander の書いた内容と逐一照応させることができる。しかもその過程において、漱石がおかしている一つの事実の誤認によって、彼が Alexander に頼っていたという証拠を更に固めることができるのである。

「兩人がここに引越したのは千八百三十四年六月十日で、引越の途中に下女の持って居たカナリヤが籠の中で囀ったといふ事迄知れて居る」と漱石は書いている。カナリヤの持主が下女であったということになる。Froude の伝記を見れば、これが Carlyle 夫人の愛鳥で、彼女がクレイゲンパトックからもって来たものであることは、容易に分るのである (Carlyle's Early Life, vol. 2,

pp. 450—51) が、Alexander には、次のような部分しか引用されていない。
We proceeded all through Belgrave Square hither, with our Servant, our looser luggage, ourselves and a little canary bird (“Chiko” which she had brought with her from Craigenputtock); ... Chiko ... burst into singing, which we took as a good omen. (p. 16) [私たちはベルグレイヴ・スクエアを通りぬけてこちらへ向って進んだ。一行は、女中と、もう一つしまりのない荷物と、私たち夫婦とかわいいカナリヤ (“チョコ” といって、彼女がクレイゲンパトックからもって来たものである) とであった…… チコが…… 突然に鳴き出したので私たちはそれを吉兆ととった。]これはその文面から判断して Carlyle の『回想記』からの抜萃に違いないが、“Craigenputtock” に余程注意を払わなかったならば、またその下女 (Bessie Barnet) というのが、彼らの引越の前日の晩に雇い入れた女であることを知らなかったならば、極めて誤解を招き易いような引き方である。(もっとも漱石の文章を、そのときに下女が手にもっていた、という意味に読めば、問題は無いのだが、いずれにしても、これは、注を必要とする個所である。 事実、 *Carlyle's House* ののちの版では、引用文中の “she” が女中と間違われぬような配慮から、“His wife” という脚注がつけられるようになった。)

漱石が一しおの共感をこめて書いているのは、Carlyle の屋根裏の書斎のことである。「四階へ来た時は縹緲として何事とも知らず嬉しかった」で始まる部分である。Carlyle は、チェイン・ローでの生活 9 年目の 1843 年から、この部屋の建造を考えていた。それが一つには費用の関係で、もう一つには彼らの保有期間が不確定であったために、実現されないままになっていたのである。しかし、この「電光的人……の癡癖は彼の身辺を圍繞して無遠慮に起る音響を無心に聞き流して著作に耽るの餘裕を與へなかった。」そして、Alexander によれば、「1853 年には、ピアノ、犬、鸚鵡、“悪魔的にわとり” (“demon fowls”) のたてる騒音がもはや堪え難いものとなったのである。」漱石が上の文のあとすぐに「彼のエイトキン夫人に與へたる書翰にいふ」と続いているのも、Alexander と同じである。その部分を引用する。

Carlyle writes to his sister, Mrs Aitkin, on August 11th, 1853 :
' All summer I have been more or less annoyed with noises, even accidental ones, which get free access through my open windows : all the tinkering and "repairing" has done me no good in that respect At length , after deep deliberation, I have fairly decided to have a top storey put upon the house, one big apartment, 20 feet square, with thin *double* walls, light from the top, & c. , and artfully ventilated, — into which no sound *can* come : and all the cocks in nature may crow round it, without my hearing a whisper of them ! ' (p. 35)

漱石の文章が、彼流にこの一節を翻訳したものであることは疑いをいれない。この新しい書斎は、松材の大戸棚を始め、いくつかの付属品をふくめて 200 ポンド足らずででき上った。そして 1854 年 1 月に Carlyle はこの部屋に移り、予想以上の事態の好転を喜ぶのであるが、今度は別の悩みが彼を襲うことになるのである。『主要な欠点というのは、すぐ近隣の騒音が排除されたかわりに、「階下にいるときには思いもよらなかった害悪」、汽車の汽笛、鐘の音など、遠方からの騒音のために、この高巢でも彼は苦しめられたということであつた。』

(The chief fault, he said was that although the noises in the immediate neighbourhood were excluded, other sounds in the distance, railway whistles, bells, and the like, " evils that he knew not of " in the lower rooms, became in this eery painfully audible,) (p. 38)
と Alexander は書いている。「斯の如く予期せられたる書斎は二千圓の費用にて先ず先ず思い通りに落成を告げて…… 」から始まる 漱石の一節が、やはりこの部分の翻訳であることも明らかである。

ほかに更に細かい点——1708 年に チェイン・ロー ができたこと¹、「ハントがカーライルの細君にシェレーの塑像を贈った」こと [Alexander). p. 20]、裏窓からの光景やロンドンを見渡したときの光景についてカーライルの言ったこと (A. p. 13; p. 9)、庭に葬られたニロ (Nero. 漱石はこれを カーライ

ルの愛犬と書いているが、実はカーライル夫人の愛犬であった) のこと (A. p. 41) に関しても、逐一照応させることができるのである。

漱石が最も感慨をこめて書いているのは、何といても最後の部分——「最後の一ぷく」に関する一節であろう。この「最後の一ぷく」とは、Carlyle がよい季節になったときなど、就寝の前に庭園に出てたのしんでいた、いわゆる “final pipe” のことである。Carlyle が大のたばこ好きであったことは、カーライル博物館の案内の婆さんの説明としても書かれている通りである。²

チェイン・ローの家の庭は、Carlyle にとって絶好の喫煙の場所であった。「喫煙の点で、私にとってこんなに結構なところはありません」と、彼は1834年6月12日に彼の母宛の手紙の中に書いている。Alexander Carlyle の小冊子の最後の項 “The Garden” の冒頭にこの手紙が引用されているのであるが、漱石は、これに依拠して、「カーライルが麥藁帽を阿彌陀に被って寝巻姿の儘街へ烟管で逍遙したのは此庭園である」という部分を書いているのである。Carlyle の書いた書簡の文はこうである。 “I can wander about in dressing-gown and straw hat in it, as of old, and take my pipe in peace.” そして Alexander は、この手紙の引用のあとに、次のような説明を加えているが、漱石の叙述の続きも、これと全く同一である。 “He frequently sat and read here; and in very hot weather he sometimes wrote at a little table and writing-desk placed near the water-butt, under an awning or in a shady corner of the flagged court. There was also a ‘tent umbrella’ put up at times; ...” (p. 40)

漱石が「最後の一ぷく」をのみ終え、空を仰いで発した Carlyle の感慨をもって、この一篇をとじているのも、最初に言ったように Alexander の *Carlyle's House* と全く同じである。

この最後の部分は、Carlyle の1869年10月14日の日記文から成っている。 “Three nights ago, stepping out after midnight, with my *final* pipe, it struck me with a strange new kind of feeling. “Hah, in a little

while I shall have seen you also for the last time. God Almighty's own Theatre of Immensity, the INFINITE made palpable and visible to me: that also will be closed, flung-to in my face, and I shall never behold that either any more. And I knew so little of it: real as was my efforts and desire to know!"' (p.42) 最初にプラクティカルな面にうとい Carlyle の人がらを共感的な揶揄をふくめて書いた漱石は、ここで真に大思想家にふさわしい Carlyle の風貌を示すことによって、この作品をうまくひきしめているということができよう。「嗚呼余が最後に汝を見るの時は瞬刻の後ならん。全能の神が造れる無邊大の劇場、眼に入る無限、手に觸るゝ無限、是も亦我が眉目を掠めて去らん。而して余は遂にそを見るを得ざらん。わが力を致せるや虚ならず、知らんと欲するや切なり。而もわが知識は只此の如く微なり」

これがほとんど翻訳であるにも拘わらず、ここに何となく微妙な余韻が感じられるのは、それだけ力がこもっているからであろう。またそのあとの結びの数行で、漱石は明らかに、この偉大な思想から、現実の routine に呼び戻されたときの味気なさを、われわれに伝えている。Carlyle におけるこの無限に向っての人間の微小さの悟りに対する共感、のちに漱石にあらわれて来るいわゆる則天去私の思想の胚芽であったとは考えられないだろうか。両者とも要するに拘泥を去って解脱の境地を開くことを意味するものであり、従って、無限というものの認識に立って、有限なるものの大小の差別を超越しようとする思想であるからである。その当時の漱石の中にすでにその思想に向っての始動がなされていたかどうか、また彼が Carlyle から何らかの啓示をうけたかどうか、判断は容易ではない。しかし、彼の4回にわたる「カーライル博物館」訪問が、単なる見学でなかったことは確かである。漱石の中にはこの「チェルシーの予言者」の精神や思想についての関心が当然あったはずだし、あるいは更に求道的な意図が働いていたとさえ考えられるのである。

「〔名簿の〕前の方を繰りひろげて見ると日本人の姓名は一人もない。して見ると日本人でここへ来たのは余が始めてだたと下らぬ事が嬉しく感ぜられる」

というところから見る限り、日本人で Carlyle の旧宅を訪れたものはかつてなかったという意味にとれるが、実はそうではなかった。これは、あくまでも 1895 年に「カーライル博物館」ができてからのことであったことに注意しなければならない。漱石よりも 9 年前の明治 23 年に、荒廃したままの Carlyle の家を訪れた日本人がいたのである。新渡戸稲造である³。新渡戸稲造といえば、明治 13 年ごろに Carlyle に接して決定的な衝撃をうけ、のちに *Sartor Resartus* を 30 数回読み、あの有名な『衣裳哲学』の連続講演⁴を行って、Carlyle との関係においては、一種の神話的なものさへ感じられる存在である。彼は、漱石の 1 年あと、明治 35 年にも再び Carlyle の家を訪れ、今度は「一から十まで、すべてカーライルが生存中の通りに仕てある⁵」のを見出すのである。

漱石（慶応 3；1869—大正 5；1916）は新渡戸稲造（文久 2；1862—昭和 8；1933）とほとんど同時代人であった。彼の Carlyle との接触の系路を明確にとらえることはできないが、彼が明治 33 年にイギリス留学に発つまでに、新渡戸や内村鑑三らによって、彼らの精神的指導者として、Carlyle が礼賛されていたことを無視することはできない。なかんずく民友社刊の「十二文豪」第 1 巻として、平田久によって著わされた『カーライル』（明治 26 年）は、恐らく、漱石に何がしかの刺激を与えていたと考えていいのではあるまいか。それから明治 31 年に出版された土井林吉（晩翠）訳の『英雄論』（岡崎屋書店）についても同様のことがいえる。新渡戸によれば、明治 13 年ごろにはまだ Carlyle は全く知られていなかったように思えるが、明治初年に一世を風靡した中村敬宇訳の『西国立志篇』（明治 4、Samuel Smiles, *Self-Help*）、それから『西洋品行論』（明治 12、S. Smiles, *Character*）には、Carlyle に関するかなりの記事があることも見逃してはならない。

こうしてみると、漱石が東京大学を卒業するころ（明治 26）から熊本時代にかけては、Carlyle に対する評価が高まって来た時代であり、漱石は、あたかも、日本において精神的、思想的模範としての Carlyle の偉大さについての認識が深まりかけたところに、イギリスに留学したということになるのである。しかも神経衰弱に苦しみ、厭世観をいだき、失恋に悩み、「塵界茫々毀譽の耳朵

を撲に堪へず⁶」それを超越しようと苦闘を続けた、高尚潔癖な人格の持主であった漱石は、少くとも多くの面で、Carlyleの中に、自己の投影を感じとっていたに違いない。あるいは、それを次第に見出して行くようになったに違いない。

従って『カーライル博物館』は、上述のような明治の先駆的思想家たちにおける Carlyle への傾倒、思想的影響の過程における、漱石独自の Carlyle のイメージの設立であるという意味をもつのである。そしてそれは、当然その後における彼の文学活動とさまざまな形で関連しないわけにはいかない。『二百十日』にあらわれる社会的不平等に対する憤りには、*The French Revolution* への共感があふれているようであり、また『野分』における「解脱と拘泥」の主題は、結局 *Sartor Resartus* における「自己放棄 (self-annihilation) への志向と同一のものであり、その行きつくところに、先の無限なるものと、有限の存在についての悟りがあると思うのである。トイフェルズドレック (*Teufelsdröckh*) の絶望と懊悩、彼の「永遠の否定」から「永遠の肯定」に至る魂の試練と自己確立の過程は、宗教や人種の区別を超えた普遍的な、真摯な人間共通の思想的遍歴のパターンとして、あるいはモデルとして、漱石における東洋的思想と融合することができたと思うのである。

最後に、漱石の博士号辞退と Carlyle の「ヂスレリー一周旋にかかる年給」の辞退を通して、両者の気質の類似を見ることにする。

漱石は、明治44年2月20日に、文部省から学位授与の通知をうけたが、翌21日に文部省専門学務局長福原隼二郎宛の手紙によって、これを辞退した。その理由は「小生は今日迄たゞの夏目なにがしとして世を渡って参りましたし、是から先も矢張りただの夏目なにがしで暮したい希望を持って居」⁷」だからであった。

Carlyle の年給の辞退とは、正確に言えば、彼の晩年1874年12月27日に、当時の宰相 Benjamin Disraeli が、女王に具申して、ナイトの最高勲章である大バス勲位 (the Grand Cross of the Bath) の授与と年金の給付を取計raitたいという申し出に対する辞退のことである。この Disraeli の手紙と Carlyle

の辞退の返事の写しが、今日では「カーライル博物館」の例の屋根裏書斎にある Carlyle 愛用の机の上におかれてある。(もっとも漱石の訪問当時からそうであったのかどうかは分らないのだが。)この辞退の中にも Carlyle の質実高潔の氣質が遺憾なく発揮されているといえよう。彼は最初に丁重に感謝の辞を述べたあと、次のように書いているのである。

“... I have only to add that your splendid and generous proposals for my practical behoof, must not any of them take effect; that titles of honour are, in all degree of them, out of keeping with tenor of my own poor existence hitherto in the epoch of the world, and would be an encumbrance, not a furtherance to me; that as to money, it was, after long years of rigorous and frugal, but also (thank God, and those that are gone before me) not degrading poverty, become in this latter time amply abundant, even super-abundant; more of it, too, now a hindrance, not a help to me; so that royal or other bounty would be more than thrown away in my case; and in brief, that except the feeling of your fine and noble conduct on this occasion, which is a real and permanent possession, there cannot anything be done that would not now be sorrow rather than a pleasure....”

(ただここに申し上げたいことは、小生の一身上にかかる過分の寛大なお申し出は、いっさい実行に移されませぬよう、また叙勲の件につきましては、位階の如何に拘わりませず、今時代における今日までの不肖の生活には全く相そぐわぬものと申すべく、足手まといにこそなれ、力添えにはなるまじく、更に金銭面におきましては、長年にわたる 厳格質素な生活の中にありまして、(神と先立たれた人たちのお蔭をもちまして) 貧窮に恥をさらすほどではなく、今この年におきましては、むしろもて余すくらいになって参りましたからには、これまたこれ以上は、厄介になるばかりで何ら役に立つものではなく、従いまして、王室その他よりの切角の思召しも、小生におきましては無用の長物と化するほかはないということであります。要しまするに、この度の貴殿の懇ろな

気高いおとりなしのお気持ちこそ、真にして永遠の贈物と申すべく、ほかはいかなることをなし下されても、喜びというよりは悲しみとなるばかりと存する次第であります。)

Froude によれば、当時の政府としては、この辞退を容易に認めようとせず、秘かに Carlyle の翻意を促すための工作も行われたようである。しかし、叙勲がその気質と生活態度に反するという彼の確信は動かないものであった。つまり彼は、“plain” (ただの) Thomas Carlyle でいたかったのである。⁸

漱石の学位辞退に関して、旧師マードックから来た「喜び」の手紙の中に、グラッドスーンやカーライルやスペンサーの名が引いてあったことに対して漱石は、「是には恐縮した。余が博士を辞する時に、是等前人の先例は、毫も余が脳裏に閃めかなかったからである。——余が決断を促す動機の一部をも形づくらなかったからである。⁹」と書いている。が、彼がそれより6年前に、Carlyle のそのことについて書いているのは事実であるから、例えその動機とはならなかったとしても、彼の記憶の一部分にあったことは否定できない。少くとも漱石が、彼自身の生活信条の中に、Carlyle とのアフィニティを意識していたということは、どう見てもいいことになるのである。漱石はそれを「徳義の脊髄と云ふ新奇でかつ趣のある文面」だといって、半分茶化しているのであるが、マードックというスコットランド人が、彼に送ったモラル・バックボーンを有しているという賛辞は、同じくスコットランド人である Carlyle と日本での愛弟子漱石の類似を巧みに言いあてた評価であったと思うのである。

注1. Alexander Carlyle の *Carlyle's House* の本文の書き出しが “ ‘ This is Cheyne Row, 1708 ’ ; so reads the stone tablet fixed in the outer gable wall of the southmost house of the terrace The name ‘ Cheyne ’ is commemorative of Lord Cheyne, who opened the site. ” となっている。

2. Carlyle と Tennyson が無二のたばこ仲間であったことは、Charles Richard Sanders, “Carlyle and Tennyson, *PMLA*, vol. 76, no. 1, 1961, March に興味深く書かれている。なお案内の婆さんの説明では、Tennyson が最初に Carlyle を訪問したのは1844年10月12日となっているが、1842年12月28日付の弟 Alexander 宛の手紙に Carlyle は、Tennyson が訪ねて来たことをすでに述べている。
3. 『新渡戸稲造君談話「ゲーテとカーライル」』、『女学雑誌』49号（明治38年8月10日）参照。
4. 著物としては 高木八尺編『新渡戸稲造先生講演「衣裳哲学」』（研究社、1938）
5. 上掲『女学雑誌』
6. 正岡子規宛の書簡、明治27年10月16日。
7. 岩波『漱石全集』第16巻所収「博士問題」参照。
8. J. A Froude, *Carlyle's Life in London* (Longmans, 1890), vol. 2, p. 462.
9. 岩波『漱石全集』第11巻所収「博士問題とマードック先生と余」

Summary

Soseki Natsume and *Carlyle's House*

Masaie Matsumura

"During my stay in London I have visited Carlyle's House four times and put my signature four times in this autograph album," writes Soseki Natsume in his *Carlyle's House* (1905). It is obvious that he had uncommon interest in Carlyle; he recognized he had much in common with Carlyle in his temperament and personality. Soseki's sketch covers only a few aspects of Carlyle's life since he and Mrs. Carlyle settled themselves in Cheyne Row in 1834, but they are of no desultory choice. We feel his sympathy, even his affinity with Carlyle's personality that was expressed in his retreat into "the attic study," "the final pipe" at night in the garden, and his refusal of Disraeli's offer of the Grand Cross of the Bath and pension—the three major subjects Soseki concentrated himself on. These aspects of Carlyle's life are of course incorporated into *Carlyle's Early Life*, *Carlyle's Life in London* by J. A. Froude, and his own *Reminiscence*, but they were yet outside of Soseki's utilization in that stage. The model for Soseki was the *Carlyle's House* by Alexander Carlyle, a nephew to Thomas, which was published in 1896 as a guide-book to Carlyle's House which was open to public in the previous year. Comparison of the two reveals an exact parallel and the same pattern of the content.